

# “新潟美人”展によせて

伊東 祐之

昭和五(一九三〇)年『日本代表美人

全国三百新聞社選』というグラフィック

が発売されました。これは、日本電報通

信社が全国の三〇〇の新聞社に美人を

推薦してもらい、その写真を画家伊東

深水や舞踊家石井漠、小説家菊池寛、俳

優尾上梅幸らが審査する美人コンテス

トを行い、その結果を出版したもので

す。「良家の令嬢も職業婦人もあり、従

つて各人の生活態度から生れる美も千

差万別の趣きを見せたところに本社計

画の面白さがある。」と自賛していま

す。特選十人の筆頭を飾るのは東京市

立第一高女研究科在学中の女性です。

この特選十人の中に新潟毎日新聞社が

推薦した新潟市の梅沢稲千代がいます。

ほかに新潟市から推薦されたのは、新

潟新聞社の皆川幸子、新潟時事新聞社

の真柄政枝、新潟民報社の村上桃枝で

す。この四人は芸妓です。他の道府県の

新聞社は、働く女性やスポーツ選手、学

生なども推薦していますが、新潟では

美人といえば芸妓だったのでしょう。

新潟新聞社では推薦する美人を読者投

票で選んでいます。その投票で名の上

がった女性たちは、流行のカフェーや

ビアホールの女性もいますが、多くは

芸妓です。ちなみに特選十人に選ばれ

た梅沢稲千代は、新潟新聞社の投票で

は十四位でした。新潟では「美人」は芸

妓を指す言葉として長く使われてきた

と言っているでしょう。

湊町新潟は、江戸時代から日本海を

行く廻船の寄港地でした。新潟町は富

もたならず廻船を大切に思い、船頭を

もてなしました。その役割の一部を

担っていたのは新潟の女性たちでした。

文政二(一八一九)年版行の「新潟細見」

というガイドブックには、遊女を置く

店一七六軒、遊女六〇九人が記されて

います。天保二(一八三一)年に江戸か

ら松島、越後、信濃、上野をめぐる旅を

した絵師長谷川雪且は、その情景を「北

国一覽写」に描いています。新潟町では

揚げ屋での宴会の様子をスケッチし、

汐汲を踊るかむろや遊女を特にピック

アップして情報を加えています。

文政十一(一八二八)年から東北・越

後を旅回りの江戸の芸人繁太夫は、

新潟で「女郎芸者は色白く美敷」「所の

女子水にあひて誠に漉通る様に暉麗

也」と日記に書いています。彼がその土

地の女を一般的に「美しい」と日記中

に記したのは、唯一新潟のみです。嘉

永二(一八四九)年に新潟湊に入船し

た若狭の船頭は「これや此 親おも子

をもわすらるる 新潟女郎のこへとす

がたと」と歌を遺しています。慶応三

(一八六七)年に新潟で登楼した南部藩

士は遊女・芸者を評して「うるわしき女

ばかりなり」と道中記に記しています。

全国の人々が新潟の遊女・芸者は美人と

いう評判を知って新潟を訪れ、実際に

見聞して評判を確認し、またその情報

が広がっていくのでしょう。

明治以降、遊女(娼妓)と芸者(芸妓)

は区別され、遊廓が北の砂丘地に作ら

れて古町には芸妓が残ります。評判の

新潟芸妓の芸はますます磨かれ、新潟

を訪れる人々を驚嘆させます。東京で

名をあげる芸妓や有名人の寵愛を受け

る芸妓も生まれます。一方では芸妓を

座敷に呼ぶことのできない人々も、置

屋や料亭を往き来する芸妓を目にし、

小路に流れる芸妓のさらう音曲を聞き、

劇場で開催されるおさらい会に詰めか

けます。新聞や写真が発達するにつれ

て、新聞や雑誌には芸妓の恋愛や落籍、

妊娠、座敷での失敗などの情報や醜聞

が掲載されてきました。新潟を紹介す

る本には芸妓の写真が載り、絵葉書で

顔や容姿が売り出されます。戦時下には

様々な「新潟美人」と題された絵葉書

セットが慰問袋に詰められて戦地へ送

られます。

近代を通じて、新潟の芸妓は、芸能・

文化を担うタレントとして、「新潟情

緒」を体現する「新潟美人」と位置づけ

られていきます。そして、一方では身近

なアイドルとして「新潟美人」と呼ば

れ、消費されていたのです。「新潟美人」

は、新潟の歴史に規定され、様々な意味

で新潟のシンボルとしての役割を負っ

てきた存在だったといえるでしょう。

(いとう すけゆき 副館長)



昭和5年に日本電報通信社が企画した「日本代表美人」で特選に選ばれた新潟の芸妓、梅沢稲千代。(「日本代表美人 全国三百新聞社選」日本電報通信社発行、昭和5(1930)年)

## 常設展示室から

# 低湿地に暮らす技術 (ジオラマとロッカー展示)

当館の常設展示室には、潟べりの風景を再現した実物大のジオラマがあります。ジオラマという展示手法は歴史系・自然系を問わず多くの博物館で採用されていますが、歴史系の博物館で人の手をはいていない低湿地の自然を再現しているジオラマは珍しいのではないかと思います。

このジオラマは、展示ストーリーの中で二つの役割を担っています。一つ目は開墾される前の蒲原平野の原風景を表現する役割です。江戸時代はじめの新田開発以来、水はけが悪いヤチや潟があちこちに点在していることは、新潟市域の農村部にとって大きな課題でした。20世紀中頃に土地改良事業が進展したことによって、こういった風景がひろがっている地域は減少しましたが、福島潟、鳥屋野潟、佐潟などにいけば、四季折々の潟の風景をみることができます。潟の水面が広がっている景観は市域の平野部の原風景であるといえます。

二つ目の役割は、ある程度耕地を開墾し家数が増えた段階の農村において、狩猟や漁労、採集の舞台であった潟を紹介することです。ヒシ、マコモ（新潟ではガツボなどの名称で呼ばれる）、ヨシ（アシ）などの植物は、衣食住のいろいろな場面で利用されていました。魚や鳥などの生き物は自家の食糧となるほか、現金収入を得る目的でも盛んに獲られていました。これらの動植



物は、単純に暮らしの素材として利用されていただけでなく、採集や漁労などの共同労働にはレクリエーション的な楽しみもあることから、村の暮らしをいろいろ役割も担っていました。

また、このジオラマの各要素と対応する生活の技術や、六つの分野にわけ、それぞれにロッカー風の扉を設けて、動植物の特徴と、その主な利用方法について紹介しています。ジオラマとロッカー展示コーナーを歩き来して見比べてみると、いままで知らなかったいろいろな暮らしの知恵や工夫が発見できるのではないのでしょうか。

岩野邦康(いわの くにやす 学芸員)

## おすすめの1冊

### 「イザベラ・バード紀行 『日本奥地紀行』の謎を読む

本誌十四号にて、『イザベラ・バードの日本紀行』(講談社文庫 上下巻)をご紹介しました。そこには、イザベラ・バードが見た日本の風土や、彼女が出会った異文化・日本がいまききと描かれています。このイギリス人女性の紀行文は明治初期の東北日本の姿を伝えるものとして絶賛されました。

しかし、読み進めると、不明な旅程や、現代の私たちには想像しづらい記述がでています。本書は、バードの訪れた地を繋ぎ合わせて、『日本奥地紀行』の行間を読み解くことを目的に書かれました。筆者は、バードの足取りを洗い直し、滞在した各地での時代背景を調査し、「なぜバードがそのように表現したのか」という謎を解き明かすことで、その全容を明らかにしようと試みています。

本書をあわせて読むことで、バードが見た日本、そして、バードを受け入れた「日本の奥地の人々」の姿がより明確にイメージできると思います。より深くバードの旅を知りたい人におすすめです。

(藍野かおり 学芸員)



伊藤孝博(著)  
2010年8月  
無明舎出版